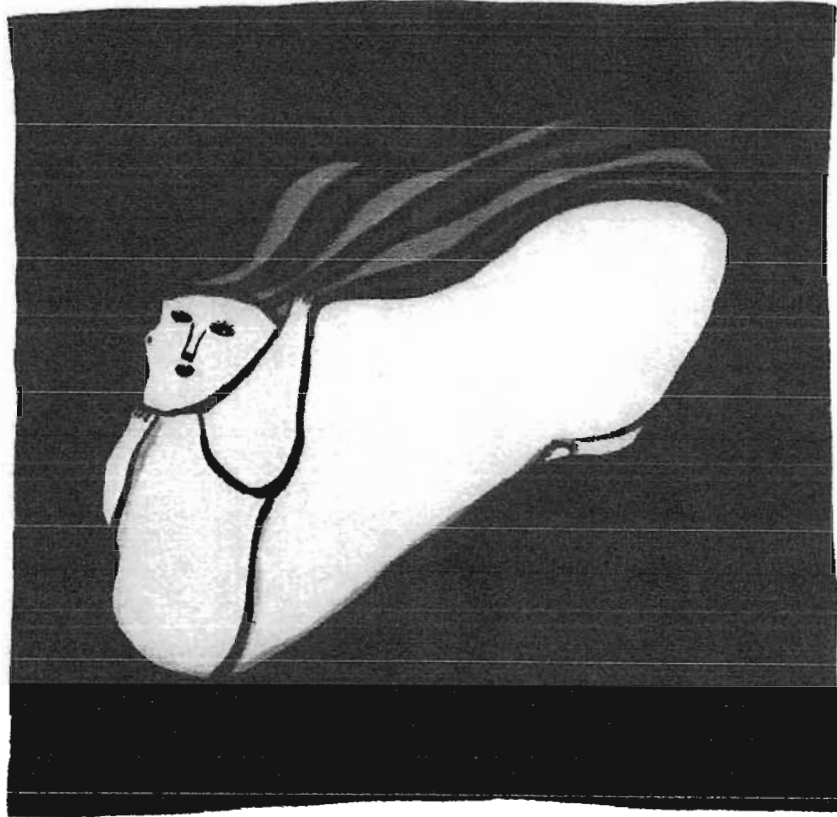


季刊

はゆるはうす

2023年 vol.3—第⑦号

하늘하우스



2019 natsu

今月の内容
●
contents

巻頭言 「お互い、元気を出そう！」／前田憲二

安倍元首相の最後の言葉を読む／和田春樹

「わが祖国 両博士の運命の種」を読んで／武田玉子

窓／上野都

「秋鷲」が来る —伊東静雄の「単独者」意識／武藤雅治

紙芝居「水にのまれた村」／柿崎千枝子

子どもの命を守ることが急務／野島テツ子

親友・中智氏の突然の死……／前田憲二

編集後記／黒田貴史

*表紙版画・造形作家／井坂奈津子

親友・中智氏の突然の死……

前田憲二

『ハヌルハウス76号』に『「チョッコン」考』を記した中三十四氏は、本名・中智氏で一九八八年、夏以後の付き合いになる。

私は友人の李義則氏と二人で、浅草の小屋でやっている名画といわれる短編映画を観に行った。八八年九月だったと思う。

ちょうど、私は長編映画「神々の履歴書」を完成させたばかりだった。朝日新聞全国紙に映画完成の記事が大きく掲載された。

そんなこともあつてか、映画館から出てくると、すらりとした青年が、「前田監督」じゃないですかと声をかけてきた。氏も短編映画を観に来ていたのだ。

聞けば広島から来たとのこと。

咄嗟のことだったので少々驚いたが、ビールでも一杯やるかと氏を誘い三人で小さな居酒屋にはいった。

ビール瓶が4、5本空き、冷酒に変え、その頃の私は下戸だったので、二人はガンガンとやり、映画の話題がつきつきと飛び交った。

その青年、中氏は大変な映画通で、「神々」を広島で上映したいといってくれた。そして同時に2、3名の講師を呼んで講演会もやりたいとのことだった。

「監督、どなたか有名な知人を二人ばかり招待し、監督にも話をしていたら……」と。あまりにも調子がいいので半信半疑だったが、とりあえず私は広島へ飛ぶ約束をした。

氏のたまり場へ2、3回は通つただろうか。ところが「神々」は他の地でも引つ張りだこで韓国からも上映の話がきていた。

とはいえ、中氏の熱意に負け、大阪の桃山学院大学の沖浦和光氏とルポライターの鎌田慧氏に広島行きを依頼した。お二人は快く応じてくれ、三人が舞台に立ち、短い講演をし、上映会がはじまった。劇場は超満員で、2回上映した。

お二人は夜行で即日帰郷。ともに超多忙だったのだ。翌日も上映会があり、私は中氏宅で一泊した。美味な焼き肉をしこたまごちそうになった。

中氏は、広島では高名な映画プロデューサーで、主に名画中心の上映プロデューサーだった。私の全作品は氏の力で、すべて広島で上映されている。それもこれも奥様の中純子氏の陰の力があつたためでもあるだろう。

また、中氏は多くの友人にも恵まれ、友人たちの協力があつての上映会成功だと思つている。

今年、5月6日土曜日、朝。中智氏より電話がはいる。今、東京の娘を訪ね、女房と来ている。これから監督の清瀬の家へ行くという。

団地の家は、わかるのかと聞けば、ケイタイがあるから何の心配もないとのこと。

20分もすると、ブザーが鳴り、中氏が元気な姿で飄然と現れた。ケイタイがあれば何でもすぐわかるんだよ、と。

わが女房は裏千家の教授をやっているが、たまたまその日は家にいた。中さん、一服いかがとたずねると、ぜひ呑みたいとのこと。

俄に一服、二服と抹茶を呑み、各部屋を眺め、「じゃ、蕎麦屋へ行くか」と誘うと、行こう行こうと元気がでる。私が懇意にしている、氏もよく行った蕎麦屋まで語り合いながら10分ばかり歩いていった。

久しぶりに行ったので、店の様子も少々変わっていたが、ビールと蕎麦に二人は満足した。

氏は店主に、タクシーを呼んでくれと依頼した。氏は私を家まで送ってくれ、その足でタクシーに乗って清瀬駅に向かった。中智氏は手を上げ、監督、いずれまたといって私を降ろし、にこりと笑って清瀬駅までと、運転手に告げた。

中智氏の顔は明るく、大変元気で笑顔だった。

その笑顔が今も忘れられない。

中智さん、安らかに……。合掌。

まえだ・けんじ（映画監督）



「チョツコン」考

中三十四

僕の生まれ育ったところは福岡県の豊前地方、築上郡新吉富村である。昭和20年代、僕が小学2、3年生頃の遊びに「チョツコン」があった。道具といえば15センチくらいの短い棒と1メートルくらいの長い棒の二つだけ。現在も新吉富の中村に在住の小生の盟友・前田満氏に、当時の遊び方を詳しく取材した。

打ち方は一人だけで残りは守備。5、6人で遊んでいた。先ず、地面に楕円形の穴を穿き、打ち方が穴に短棒を渡し置いて、長棒ですくい上げて飛ばす。守備側がその短棒をノーバウンドで捕れば、打ち方と交代する。ワンバウンド以上でころがった棒を拾った者は、その場所から、打ち手が穴に横に寝かせて置いた長棒目がけて短棒を投げる。短棒が長棒に当たれば打ち方と交代する。外れれば打ち方は次の段階へと進む。

ここからは、楕円穴に斜めに差し込んで立てかけた短棒を、長棒で叩いて跳ね上げ、それを思い切り打つ。短棒はうなりを上げて回転しながら飛んでゆく。

もちろん頭に当たったりしたらたまったものではないから、守備側は予め帽子などを手に巻き捕獲の準備をしていた。それでも腕や足に当たって青痣やタンコブが絶えなかった。今なら危険な遊びとして教姿などが禁止を強制することだろう。

さて、豊前の片田舎で遊んでいたこの「チョツコン」というゲーム。はるか離れた広島県の山間の町、比婆郡比和町でも昭和20年代

初めまで全く同じ遊びが行われていた。

名前は「チョンガラ」という。

「比和の民族と歴史」という小冊子の中で村上康義氏が記しているのです承のもと全文を紹介する。

村上さんの文を読んだ時、なんだ、チョツコンと同じじゃないか、と驚愕したものである。

木ベース（チョンガラベース）

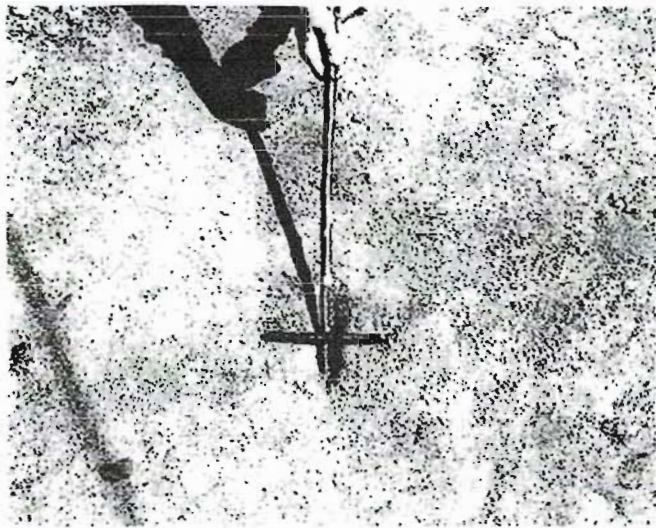
村上康義

終戦直後の昭和二十二・三年頃までの遊びで、遊び道具のなかった時で、野球のボールが皆の手に入るまでの野球的な遊びであった。昭和二十二年ごろは子供も多く、夏休みには一つの淵で（川の水がよどんで深い所）男女で十四・五人位が水浴びや魚捕りを行い、川遊びが寒くなると川から上がり近くの庭に集まり木ベースを行っていたものである。

木ベースとは、大小の木、二本が遊び道具であった。小さい木が現在のボールの役目に匹敵して、木の直径が十二・三ミリで長さ十五センチ程度で、大きい木の直径は十六・七ミリで長さ五十センチ程度、これがバットの役割をしていたが、この木の大きさに細かい決まりはなかった。

遊び方は、水浴場の近くの家の庭でよく行った。庭端に、幅三センチ、長さ十センチ程度の溝を地面に掘って、この溝に小さい方の木を渡して大きい木を溝から小さい木の方に入れて小さい木を掘り上げて前に飛ばして、一塁ベースまで走って行って帰る。他の者は、木を打つ前に思い思いに並び、打ち上げた木を捕らえる。捕らえたらアウトで捕らえた人が打ちに行く。

このゲームは小さい子供達が行っていた。四年生から六年生の上級生になると、小さい木の打ち方が少し違って、小さい木を溝に立てかけて、その小さい木をたたいて打ち上げてさらにその木を打つて前に飛ばすが木は打たれて弾みがついてブンブン唸って飛んでくるので、捕る手が痛いから帽子を脱いで（当時は戦闘帽）手に覆い



浅い縦溝の上にボール替わりの棒を置き、大きい棒で飛ばす前のようす

小さい木を捕るといった今思えば危険な遊びであったが、この遊びは場所があまり広くなくても、多くの子供達がゲームに参加できることからよく遊んだものである。

◇ ◇ ◇

どうしてだろう。福岡県の片田舎と、広島県の山深い比和町の子どもの遊びの共通項。「チョッコン」と「チョンガラ」、なんとなく似たような響き。何かある、と直感した。この名前の響きには朝鮮半島の匂いがする。

村上氏に尋ねると、比和町にも戦前から多くの朝鮮の人たちが住んでいたという。土木作業員だったり、炭焼に従事したり、相当数の人だったと。多くは去ってしまったが、今でも少数の方が子孫として残り、歯医者などで活躍しているという。

かくいう僕の故郷も少なくない朝鮮の方々があった。詳しくは季刊ハヌルハウス2017年冬号に寄稿しているので割愛するが、共通しているのは、朝鮮の人たちが近辺に戦前から多数住んでいた、ということだ。

もちろん、前田満氏に聞いても、一緒に遊んだことはないし（チョッコン）、習った覚えもない、ということだったし、村上氏も同様であった。ということは多分、僕や前田氏や村上氏の年代以前の子どもたちが見よう見まねか、あるいは一緒に遊んで、このゲームが定着したのではないか。

そこで韓国人の友人ムン・デヒョン氏に尋ねてみた。こういう遊びを知りませんか、と。

彼は全羅北道のコチャンで生まれ育った。コチャンはパンソリ発祥の地として有名で小生も訪問したことがあるが、新吉富村と同じくらいの田舎である。彼の答えは明快だった。

「ああ、それは『チャチギ』ですよ。朝鮮半島で、李朝時代から伝わる伝統的な子どもの遊びですよ。私も子どもの頃よく遊びました」

そして遊びのルールを次のように説明してくれた。

チャチギ

ムン・デヒョン

チャチギ(차치기)という名称は、차(定規)と치다(打つ)の合成語で、「チャで打つ遊び」と呼ばれてつけられた名前である。チャは測量ツールの定規ではなく木の棒を持って遊ぶのだが、その棒の飛んだ距離を測る為につけられた名前のようなのである。

地面に線を引いたり、溝を掘って家と呼ぶ陣を決め、グループを分けて片方が長い棒で短い棒を打って飛ばすと、他方はこれを受けて家に投げて陣に近づける。広い場所と棒の大・小二つがあれば簡単に遊べるし、昔から子供達がたくさん遊んだ。

遊び方は、円や線を描いての陣、地穴を掘っての陣、二通りがある。円陣を引いての遊びは、攻撃者が長い棒で短い棒を打って飛ばす。短い棒が地面に落ちる前に手で捕ると攻撃側と交代になる。ワンバウンド以外は、拾った場所から円陣の中に入るように投げる。穴を掘っての遊びは、円を引く代わりに楕円形の穴を掘り、その穴に乗せるか斜めに差し込んだ短い棒を長い棒で打つ。ノーバウンドで捕ったら交代。ワンバウンド以外は、穴に渡した長棒目がけて、拾った場所から短棒を投げ、うまく当たったら交代する。

◇ ◇ ◇
思うに、何気なく遊んでいた諸々の中にも、朝鮮文化が深く浸透



チャチギ 子どもたちの遊び

していたと言えまいか。戦前、物のない時代、大小の棒があれば遊べた「チョッコン」「チョンガラ」。

恐らく朝鮮の子どもたちが遊んでいるのを見た日本の子どもたちが真似をして、あるいは一緒に遊んで、このゲームが日本中に広まっていったと、そう僕は確信している。

読者の中で、そういえば同じ遊びをした記憶がある、という方がいたら、是非ハヌルの事務局へご連絡願いたい。

なか・さとし(ハヌルハウスプロデューサー)

(本稿校正中に「ご家族から中三十四様の計報を受けました。ご冥福をお祈りいたします。編集部)

(桃子 FB)

父が18日の朝に急性大動脈解離で急死して、今日まで忌引きで広島に帰ってました。元氣そのものでこれから飲みに行くっていうときに突然倒れてものの1分くらいで突然逝ってしまっただ。話を聞くとデスノートに名前だけ書かれた人の亡くなり方そのもの。本当に一瞬で。突然で。わけわからん。

せめてもの救いは母と弟が居合わせて最期の一部始終をみてたこと。弟は一生懸命心臓マッサージしてくれたそう。消防署は近所なので、119に電話してる間にすぐ救急車は到着したらしい。たまたまG7サミットのため弟は仕事が休みで家にいたから、ほんとによかった。

とにかく患部が悪すぎた。心臓から一番近い大動脈が破裂してどうにも手の施しようがなかったそう。前兆もなく予知も不可能らしい。突然胸を押さえて倒れて、2時間後には遺体となって帰宅した。もう、本当にわけわからん。あんなに元氣だったのに。翌日からは母と九州旅行の予定だったのに。

大好きなお父さんだったから、この1週間ずーっと泣いてた。平気にしてても、何かの拍子にぶわっと涙が出るのだ。通夜の日には親族が飲んでるとこ日本酒持って抜け出して、唇に日本酒垂らしたって父娘の最後のサシ飲みした。

父は本当に人に好かれる人だったので、家から出て葬儀場に行く時、ご近所さんが30人くらい集まってきて駆け寄って見送ってくれて、本当にありがたかったし驚いた。(葬儀は家族葬)たくさんの方が父のために涙を流してくれた。家族も知人も、みんなが寂しがってくれた。通夜と葬儀は父が5年前まで勤めていた冠婚葬祭の会社でやったので、スタッフはほぼ父を知る人たちで、泣きながら湯灌してくれたりグレードの高い霊柩車を回してくれたり、通常の利用者よりもすごく心のこもった送り出しをご支援してくださったと思う。感謝しかない。

1週間経って、ようやくSNSを開く気になれた。父のfacebookアカウントの追悼アカウントへの移行申請をしないとイケないし。Gmailアカウントの停止申請もしないとだけど、こちらはおいおい。私たちが把握していない知人からコンタクトがあったときにお伝えできるよう、年内は父の携帯は母の名義に継承して解約せずに置いておく手続きを、昨日してきた。そのうち自分の色んなアカウントも整理して、デジタル終活ちゃんと考えておかないとな、とつくづく思ったのでした。

父の日の宣伝が街のあちこちにあって、ほんま辛いわ〜！去年の父の日は弟と折半してゴールデンカムイ全巻大人買いしてあげたのだった。今年は弟と折半して、最後の父の日に、と仏壇を買った。

明日から仕事。仕事、できるかな。

少しでも気が紛れるかな。

でも一番辛いのは、父との日常を突然無くした母。前より電話したり帰省したりしよう。なんでもない日常って、本当に本当に幸せなのだ。

※この投稿はたぶんまともに返信できません。

予めご了承ください。